

母親の声を聞く調査、出産経験、女性の好み1

2013年5月には「第3回母親の声を聞く調査：妊娠と出産」の結果が発表された。2,400名の女性を対象としたオンラインで調査が行われ、妊娠や出産の経験、育児、選択肢、自己コントロール、知識、意思決定などに焦点が当てられている。殆どの母親は超音波検査を少なくとも1回は受け、70%が3回以上、34%が5回以上となっている。41%が分娩誘発を、31%が帝王切開を経験し、分娩誘発と硬膜外麻酔を受けた初産婦の帝王切開率は高い。医学的適応以外は、分娩に介入すべきではないという意見に58%が賛成し反対は僅か16%であった。この意見に賛成する女性の割合は調査を重ねるごとに上昇しており、このような認識の変化は女性が介入とその意義について疑問を抱き始めた結果ではないかと思われる。これらの調査結果はアメリカ人女性の出産経験を知る上で極めて貴重なもので助産師や産科のスタッフが目を通すべき報告書である。

Listening to Mothers III: The Evolving Landscape of Childbearing Women's Experiences and Preferences

Frances E. Likis, CNM, NP, DrPH, FACNM, Editor-in-Chief

J Midwifery Women's Health. 2013 Jul-Aug;58(4):361-362

妊娠、睡眠障害、呼吸関連睡眠障害、睡眠障害性呼吸、むずむず脚症候群、不眠症3

工業先進国において発現頻度の高い睡眠障害は高血圧、糖尿病、肥満などの健康上のネガティブな問題と関連すると報告されている。妊娠中の睡眠障害はヘルスケア提供者にとっても見逃されがちであるが、最近の研究では睡眠障害とネガティブな妊娠の結果、即ち子癇前症、血糖の上昇、抑うつ、遷延分娩、帝王切開などとの関連性が指摘されている。出産前の睡眠障害を検出し、それを管理することによってネガティブな妊娠の結果を最小限に抑え、母児の健康を促進することができるとする多くの根拠が得られている。

この妊娠中の睡眠障害の文献的系統レビューにおいて3つの主たる睡眠障害、即ち呼吸性睡眠障害（習慣性いびきや閉塞性睡眠時無呼吸）、むずむず脚症候群（restless legs syndrome）や不眠症について検討した。これらの睡眠障害は妊娠中によく認められ、未治療のままでは母児にネガティブな影響をもたらすことになる。本論文においては、妊娠中の睡眠障害についてレビューし、母児の臨床結果との関連性について解説し、診断と管理戦略の最新の根拠を提示することとした。

Common Sleep Disorders: Management Strategies and Pregnancy Outcomes

Priscilla M. Nodine, CNM, PhD, Ellyn E. Matthews, PhD, RN, AOCN

J Midwifery Women's Health. 2013 Jul-Aug;58(4):368-377

認定看護助産師、認定助産師、助産学生、年次調査、就業状態14

アメリカ看護助産師学会（American College of Nurse-Midwives, ACNM）では会員を対象とし、年に一度調査を行っている。対象は認定看護助産師、認定助産師、助産師教育課程に在籍する学生で、背景と職務に関わるデータを収集しようとしたものである。これらのデータは3年ごとに公表されている。この論文は2009～2011年の調査から得られた会員のデータの分析結果を報告しようとしたものである。ACNMの会員には年に一度オンラインで調査表が送信される。

2009～2011年度の調査においては背景、資格、学歴、雇用の状態、免許状の5つのカテゴリーに焦点を当てた分析が行われた。回答者は主に白人の女性で、2011年度の平均年齢は51.2歳であった。大部分は修士号を有し、9.3%が博士号を有していた。回答者の約2/3は職務上の主たる責任を負っている業務は分娩介助となっており、過去3年間で殆ど変化は認められていない。

看護学の博士号を取得する認定看護助産師の数は増加しつつあるが、他の分野の博士号には変化は認められていない。認定看護助産師や認定助産師の殆どが責任を担っている職務上の職種として臨床助産診療を挙げており殆どの回答者が分娩に立ち合っているがその割合は時の経過と共に僅かながら減少してきている助産師の年収は上昇しているが、その背景となる理由は不明である。

Findings From the Analysis of the American College of Nurse-Midwives' Membership Surveys: 2009 to 2011

Kerri D. Schuiling, CNM, PhD, Theresa A. Sipe, CNM, PhD, Judith Fullerton, CNM, PhD

J Midwifery Women's Health. 2013 Jul-Aug;58(4):404-415

定性的研究、研究方法、信頼度、統計的分析、ヘルスケア28

「定性的研究は今日意味のあることなのだろうか」などと時に困惑させるような質問を發することがある。定性的研究は科学の分野でその地位を確立しているが、いろいろな疑問も沸き起こってくる。診療を導くようなデータを配信するためには、説得力があり具体的で根拠に基づいたものでなくてはならない。定性的研究において厳格性という視点や科学的視点からみて完全性が失われている例も認められる。定性的研究から得られた結果に科学的な価値を得ることが研究の目的である。これまで公表されてきた定性的研究は非常に未熟で理論的な分析を欠いているものもある。定性的研究を実施する場合は優れた科学を意識した深い思慮が求められる。

Authenticity and Scientific Integrity in Qualitative Research

Jacqueline Jones, PhD, RN

J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2013 Jul/Aug;42(4):401-402

出産の恐怖、態度、信条、プロファイリング、満足度、出産恐怖スケール、品質.....29

女性の態度と恐怖心のレベルから3つのプロフィールに分け、分娩前と分娩時のケアをどのように受け止めているかという点について比較した。自己報告質問票を用いて前方視的縦断面的コホート研究を行った。妊娠18～20週の時点で、「分娩態度プロフィールスケール」と「出産恐怖スケール」と呼ばれる評価法を用いて女性のプロフィールを決定した。妊娠34～36週と産褥2か月の時点で「患者認識インデックス」と呼ばれる評価法を用いて、ケアの質に関する受け止め方を調べた。スウェーデンとオーストラリアの2か所の病院で505名の妊婦を対象に調査を実施し、自己決定タイプ群、成り行きに任せて状況を受け入れる受容群および恐怖心の強い恐怖群の3つの群に分けた。

自己決定群では最善の結果が得られたと回答するものが多かった。恐怖群では十分なケアではなかったと回答するものが多かった。分娩前に恐怖群では心理的なケア、医療に関わるケア、専門家からの支援などが不十分と感じているものが多く、さらに専門家は患者の状況を理解していないと感じるものが多かった。分娩時のケアにおいても支援と自己コントロールの2つの領域において、十分な対応を受けていないと考えるものが多かった。

妊娠中の女性の態度のプロフィールは女性が何を重要と考え、何を必要としているか、また女性に合った分娩前と分娩時のケアのスタイルと内容を臨床家が理解し、それに合ったケアを提供する上で有用な指標となるものと思われる。女性の有する出産に対する恐怖の意識を理解することは、総合的な心理的な支援を提供するきっかけとなり、ポジティブな出産経験をもたらすことになるのではないと思われる。

The Role of Women's Attitudinal Profiles in Satisfaction with the Quality of their Antenatal and Intrapartum Care

Helen M. Haines, Ingegerd Hildingsson, Julie F. Pallant, and Christine Rubertsson

J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2013 Jul/Aug;42(4):428-441

妊娠喪失、流産、自然流産、出産経験、恐怖心38

流産の既往歴がその後の出産経験と相関するか否か、また、その後の出産において自分自身あるいは児に対してネガティブな問題を引き起こすのではないかとする恐怖と相関するか否かを、前方視的コホート研究の二次分析によって調べた。2009年1月から2011年4月の間に18～35歳の初めて生児出産を果たした女性を対象に調査を行った。妊娠20週未満で流産を経験した453名の妊婦と流産の既往のない2,401名の産婦に妊娠中と産褥1か月の時点でインタビューを行った。電話によるインタビューによって母親の出産経験と悪い結果に対する恐怖心のレベルを2群間で比較した。

母親の出産経験のスコアは2群間で統計的有意差は認められなかった。流産の既往歴を有する女性は流産の既往歴のない女性と比較し、自分自身や児における出産に伴いネガティブな問題が起こることの恐怖を有している割合は有意に高く、それぞれ52.1%と46.6%であったが、背景となる要因で補正したところ有意差は認められなかった。今回の調査結果から流産歴と出産経験との間には相関がないことが明らかとなったが恐怖心に関する調査は今後行う必要があると思われる。看護師や助産師は流産歴を有する女性に心理的な支援を提供し、分娩中に安心感を与えるような治療的コミュニケーション技術を活用する必要があるのではないと思われる。

Effect of Previous Miscarriage on the Maternal Birth Experience in the First Baby Study

Cara Bicking Kinsey, Kesha Baptiste-Roberts, Junjia Zhu, and Kristen H. Kjerulff

J Obstet Gynecol Neonatal Nurs. 2013 Jul/Aug;42(4):442-450